

病害虫発生予察情報(2月予報)

令和6年1月30日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (2月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	灰色かび病	発生量：並 (発病株率 6.5%)	1月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや多 (発病株率 6.1%)	1月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：並 (発病株率 2.4%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 7.7%)	1月中旬発生量 黄化葉巻病：少 (－) コナジラミ類：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
たまねぎ	腐敗病	発生量：多 (発病株率 1.2%)	1月下旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率 0.0%)	1月下旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：降水量：並か多い (＋)
	ネギアザミウマ	発生量：並 (寄生株率 32.0%)	1月下旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (±)
レタス (非結球 レタスを 除く)	べと病	発生量：やや少 (発病株率 1.4%)	1月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：並か多い (＋)
	斑点細菌病	発生量：やや少 (発病株率 2.4%)	1月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：並か多い (＋)
いちご	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 0.8%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率 0.8%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	炭疽病	発生量：やや少 (発病株率 0.9%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 1.6%)	1月中下旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋)
	ハダニ類	発生量：多 (寄生株率 12.7%)	1月中下旬発生量：並 (±) (ただし、複数ほ場で多～甚) 防除員からの報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率 5.2%)	1月中下旬発生量：やや多 (＋) 防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県の前10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の前10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（+）、少発要因の場合は（-）を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

**農薬情報
はこちら
で検索！**



**静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準**

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

<生育の概況>

生育は概ね平年並。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.7%（平年3.9%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。また例年12月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。
- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率は8.1%（平年9.7%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。また例年12月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（*Cf-9*）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は0.3%（平年2.7%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類は、平均寄生株率19.4%（平年9.8%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板での捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させるとともに、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年に比べ15～20日進んでいる。

●腐敗病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、一部のほ場で発生が認められ、平均発病株率3.5%（平年1.4%）と平年より多かった。
- ・本病は、凍霜害や強風雨、ネギアザミウマの食害等による傷口部から感染しやすい。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、感染が助長される。

防除対策

- ・傷んだ葉がある場合は、降雨の前後に予防散布を行う。また、ネギアザミウマの発生に注意し、本虫の防除を実施する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、鱗茎に発生は認められなかった（平年発生なし）。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状（ボトリチス葉枯症）が現れることがあるが、ボトリチス葉枯症の発生は認められなかった（平年平均発病株率1.0%）。
- ・本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。
- ・被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、平均寄生株率 25.3%（平年 29.3%）と平年よりやや少なかった。被害程度を示す被害度は、20.4（平年 15.4）と平年よりやや高かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・収穫が2月中旬以降で、本種の発生が確認されたほ場では防除を実施する。成幼虫とともに葉と葉の隙間に多く寄生しているので、寄生部位に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育はやや早い傾向。

●べと病

予報の根拠

- ・1月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率 1.5%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量が平年並か多いため、本病の発生をやや助長する（病原菌の生育適温は 10～15℃で、多湿を好む）。

防除対策

- ・本病原菌は空気伝染するため、近隣のほ場で発生が確認されている場合は薬剤の予防散布を行う。
- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・罹病残渣はほ場外に処分する。
- ・トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・1月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率 2.0%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。またトンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるため注意する。
- ・本病は比較的低温で多湿条件を好む。また凍霜害は茎葉を傷めて病原細菌の感染を助長させるため、発生に注意する。

防除対策

- ・降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

＜その他の病害虫＞

●ビッグベイン病

- ・ 1月上中旬の巡回調査では、平均発病株率 1.0%（平年 2.2%）と平年より少なかった。
- ・ 本病は土壤中に生息する菌によって媒介される土壤伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壤中のウイルス保毒菌量を少なくするように心がける。
- ・ 例年、志太地区で発生が多いため、当該地域では特に発生に注意する。

【いちご】

＜生育の概況＞

生育は県下全域で平年よりやや遅く推移しており、概ね 7 日程度遅れている。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.1%（平年 0.5%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病は気温が 20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、朝夕の冷えこみによる植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的防除を行うこと。
- ・ 曇雨天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・ 発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.1%（平年 1.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は 20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難であるため、初期発生に注意し発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.5%（平年 1.1%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出す。放置残渣は伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。
- ・ 厳冬期も緩やかに病徴は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合がある。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.5%（平年1.6%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 寄生を認めた場合は少発生のうちに防除する。
- ・ 天敵を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は14.7%（平年13.3%）と平年並であったが、多～甚発生ほ場も複数見受けられた。
- ・ いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について4名が「やや多い」、1名が「多い」と回答した。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・ 天敵を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察する。発生が多い場合には、天敵の追加放飼または天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.4%（平年2.3%）と平年よりやや多かった。
- ・ いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について4名が「やや多い」と回答した。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 花における発生状況をよく観察し、寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・ 例年多発するほ場では、開花初期の防除を徹底する。
- ・ 天敵を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

【稲】

＜その他病害虫＞

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・ 県内全域で分布が拡大している。未発生地域への人為的な貝の持ち込みを防ぐため、トラクター等の農業機械を使用する際は作業するほ場の順番を考慮するとともに、既発生ほ場から土が移動する危険がある場合には農業機械を洗浄するなどの対策をとる。
- ・ 昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・ 本種は低温に比較的弱い、土中の貝は生き残るため、2月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。
- ・ 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・ スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【小麦】

＜その他病害虫＞

●うどんこ病・赤さび病

- ・ 昨年4月上旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は52.6%（平年12.6%）と平年より多かった。また、赤さび病の平均発病株率は3.6%と平年より多かった（平年1.9%）。
- ・ 本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く、「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。またうどんこ病の第一次伝染源は、前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源は、ほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・ 止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に、薬剤の予防散布を行う。
- ・ 窒素肥料の過多を避ける。

【茶】

＜その他の病害虫＞

●赤焼病

- ・ 病原菌は細菌であり、主に強風による傷口から感染する。また、本病は寒害、凍害、霜害によって発生が助長されるため注意する。
- ・ 常発ほ場では予防的に薬剤散布を行うことが望ましい。特に、幼木園や、「つゆひかり」、「おくひかり」などの品種は本病に弱いため注意が必要である。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和6年1月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 1月27日から2月26日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項	期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。	
向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	降水量	降水量は、平年並または高い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
2週目	気温	2週目は、平年並の確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	20	70
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	10	20	70
2週目	気温	10	10	80
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月	: 1月27日(土)～2月26日(月)
1週目	: 1月27日(土)～2月2日(金)
2週目	: 2月3日(土)～2月9日(金)
3～4週目	: 2月10日(土)～2月23日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--